

東洋の思想と宗教 第四十號 令和五年（二〇二三） 三月 抜刷

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け
——陸修靜による靈寶經典分類の再考——

林

佳
恵

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け ——陸修靜による靈寶經典分類の再考——

林 佳 恵

一、はじめに

(一) 問題の所在

『法輪罪福』は、敦煌寫本(ペリオ二八六一の二、一二五六)中の靈寶經の目録(一九七四年に大淵忍爾氏により紹介される。以下、敦煌本「靈寶經目録」)に著録されている靈寶經の一つである。この目録に著録された東晉末から劉宋にかけて作られた經典を、他の靈寶經と區別して古靈寶經と呼ぶことが多く、本稿もそれに倣う。敦煌本「靈寶經目録」は、前半が「元始舊經」、後半が「仙公所受」の「新經」(以下、「仙公新經」)の目録という二部構成になっている。この目録は、陸修靜が作った靈寶經の目録の内容を保存すると考えられてお

り、従つて古靈寶經を新舊二つのカテゴリーに分類したのは陸修靜ということになる。ところで、「元始舊經」は元始天尊敎説の靈寶經を指し、「仙公新經」は葛玄が天真から傳授された靈寶經を指すとされているが、『法輪罪福』はその現行本を見る限り、「葛玄が三人の天真から授けられた經典」であるにもかかわらず、「元始舊經」に分類されている。この爲、『法輪罪福』を、本来「仙公新經」に分類されるべき經典が、例外的に「元始舊經」に分類された例とする見解もあるが、筆者はそのようには考えない。本稿では、陸修靜が『法輪罪福』を何故、「元始舊經」に分類したのかという視點から、この經典について考察する。筆者は以前、一定の分類條件を設定すると、『法輪罪福』を含む古靈寶經の現存する

經典は、一應例外なく敦煌本「靈寶經目錄」の分類通り、新舊二つのカテゴリーに分類できることを確かめている。但し、それではまだ、仙公が傳授された經典（以下、「仙公所受」經典）として構想されている『法輪罪福』が、「元始舊經」に分類された理由が十分に説明されたとは言えず、陸修靜の分類基準については、更に考察する餘地があると考ええる。また筆者は敦煌本「靈寶經目錄」の發見から始まった「古靈寶經は新舊二系統から成る」という見方に關しては、それは陸修靜が彼の靈寶經觀に基づいて古靈寶經を新舊二つの經典カテゴリーに分類した結果であり、必ずしもそのまま當時の現實の靈寶經の狀況を反映するものではないと考えている。本稿では先ず、『法輪罪福』と「仙公新經」に分類された靈寶經典（以下、「仙公新經」諸經）の間の差異の有無を確認する。次に、その差異の有無に關連して、陸修靜の靈寶經史觀に基づいた經典分類の視點から、『法輪罪福』を「元始舊經」に分類し得るか、またその分類が『法輪罪福』の内容から見ても妥當であるか否かを檢證する。これらにより、陸修靜がどのような分類基準から、「仙公所受」經典である『法輪罪福』を「元始舊經」に分類したかを考察し、改めて古靈寶經中の『法輪罪福』の位置付けを明らかにしたいと考える。

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

（二）『法輪罪福』について

敦煌本「靈寶經目錄」の「元始舊經」の目錄部分では、經典によつては、篇目名と卷目名の二つの經題が記されている。『法輪罪福』は、陸修靜が目錄を編む據り所としたとされる「舊目」に記載される經典名、即ち篇目名であり、陸修靜により『法輪罪福』に該當するとされた實際の經典の經題、即ち卷目名が『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』である。本稿では便宜上、この經典を短い篇目名の『法輪罪福』で呼ぶ。『法輪罪福』には「正統道藏」所收の經典四篇と、敦煌寫本の殘簡二點（スタイン一六〇五、一九〇六）が現存する。四篇の經典は、その内容から見て本來一つの經典が四卷に分行したものであり、本稿ではこの『正統道藏』所收の四篇を道藏本『法輪妙經』と總稱し、基本的にこのテキストを使用するが、便宜上、これらを以下のように『法輪妙經』A、B、C、Dと呼ぶ。

1. 『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』（HY三四六）…『法輪妙經』A
2. 『太上玄一眞人說勸誡法輪妙經』（HY三四八）…『法輪妙經』B
3. 『太上玄一眞人說三途五苦勸戒經』（HY四五五）…『法輪妙經』C

輪妙經」C

4. 『太上玄一真人說妙通轉神入定經』（HY三四七）：『法輪妙經』D

なお、古靈寶經典中、「仙公」、「太極仙公」等と呼ばれる葛玄については、ここでは原則として、經文以外では、葛玄で統一する。

二、『法輪罪福』と『仙公新經』

同じく「仙公所受」經典である「仙公新經」諸經と『法輪罪福』の間には、どのような違いがあるのか。もし違いがあるとすると、それは何を示しているのか。ここでは、『法輪罪福』が何に重きを置く經典であるのかという点から、「仙公新經」諸經と比較をする。『法輪罪福』が重點を置くもののひとつは、天真による經法の傳授である。道教でも、經典の傳授の系譜は師弟關係を示すと共に、經典の正統性と神聖性に關わる重要なことであり、靈寶經でもそれは例外ではない。「仙公新經」、「元始舊經」の別無く、多くの古靈寶經がどのような傳授の系譜を有するかを記している。例えば、「元始舊經」に分類された經典（以下、「元始舊經」諸經）では、『元始五老赤書玉篇眞文天書經』（HY二二）。以下、『天書經』

卷上の五丁に、「上聖太上大道君、高上玉帝、十方至眞、（中略）上詣上清太玄玉都寒靈丹殿紫微上宮、建天寶羽服詣元始天尊金闕之下、請受元始靈寶赤書玉篇眞文（上聖太上大道君、高上玉帝、十方至眞、（中略）上清太玄玉都の寒靈丹殿紫微上宮に上詣し、天寶を建て羽服し元始天尊の金闕の下に詣り、元始靈寶赤書玉篇眞文を請受す）」とあり、上聖太上大道君以下の神々が、元始天尊から『元始靈寶赤書玉篇眞文』を傳授される場面が見える。『太上洞玄靈寶智慧根上品大戒經』（HY四五七）。以下、『智慧罪根經』卷上の一丁裏にも、「元始天尊是時、當授太上道君『智慧罪根上品戒經』、五老上帝、大聖尊神、十方至眞、諸天上仙、玄和玉女萬二千五百衆、詣座（元始天尊是の時、太上道君に『智慧罪根上品戒經』を授くるに當り、五老上帝、大聖尊神、十方至眞、諸天上仙、玄和玉女萬二千五百衆、座に詣る）」云々とあり、經典傳授の場面が描寫されている。

「仙公新經」については、「仙公新經」諸經で太極真人から葛玄への傳授の系譜を設定していることが、諸先學により指摘されている⁵⁾。例として、『太上洞玄靈寶本行宿緣經』（HY一一〇六）や、『太上太極太虛上真人演太上靈寶威儀洞玄眞一自然經訣上』（敦煌寫本斷簡が現存。以下、『自然經訣』）、『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』（HY三四四）。以下、『智慧本願

經」に示された太極真人↓葛玄の傳授の系譜について、次に見て行きたい。

1. 『太上洞玄靈寶本行宿緣經』

一丁に「仙公請問太極真人高上法師曰（仙公が太極真人高上法師に請問して曰く）」とあり、太極真人高上法師が、葛玄の師であることが示され、十三丁で太極真人が「我名徐來勒、字洪元甫（我が名は徐來勒、字は洪元甫）」と述べていて、徐來勒がその名であり、この經典では太極真人徐來勒↓葛玄という傳授の系譜が考えられていることがわかる。

2. 『自然經訣』（ペリオ二四五二、『中華道藏』第三卷一〇〇頁中段）

この經典では、「太極真人徐來勒、以己卯年正月一日日中時、於會稽上虞山傳太極左仙公葛玄、字孝先（太極真人徐來勒、己卯の年の正月一日の日中の時を以て、會稽上虞山に於いて太極左仙公葛玄、字は孝先に傳ふ）」とあり、太極真人徐來勒が葛玄に經法を傳授したことが明記され、太極真人徐來勒↓葛玄という傳授の系譜が示されている。

3. 『智慧本願經』（二丁）

- ①太極仙公請問太極法師（太極仙公が太極法師に請問す）。
- ②仙公於天台山靜齋念道、稽首禮拜、請問靈寶玄師太極太

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

虛真人（仙公天台山に於いて靜齋し念道し、稽首し禮拜して、靈寶玄師太極太虛真人に請問す）。

この二つでは、葛玄が天台山で太極法師（＝靈寶玄師太極太虛真人）に拜禮し、教えを乞うていることから、ここに太極法師↓葛玄という師弟關係が在ることがわかる。

③是時太上高玄真人、嘯詠步虛洞章。（中略）。而謂太極真人曰、「卿受太上虛皇道君之命、爲其師保、亦必盡教以高上大洞之淵蹟也」（是の時太上高玄真人、步虛洞章を嘯詠す。（中略）。而して太極真人に謂ひて曰く、「卿は太上虛皇道君の命を受け、其の師保と爲り、亦必ず盡く教ふるに高上大洞の淵蹟を以てするなり」と）。

③では太上高玄真人が登場し、太極真人が太上虛皇道君の命を受けて葛玄の師保となったことを語る。①②の部分で太極法師、靈寶玄師太極太虛真人と表記されていた葛玄の師は、ここでは太極真人と呼ばれており、太極真人↓葛玄という傳授の系譜が見て取れる。

4. 『法輪罪福』

それでは、『法輪罪福』では、傳授の系譜はどの様になっているのか。『法輪妙經』A（二丁）では、太上玄一第一真人が葛玄に對し、自分たちの降臨について以下のように述べる。

太上玄一真人鬱羅翹告太極左仙公曰、「子積劫念行、(中略)、功德巍巍、行合上仙。太上命太極真人徐來勒、保汝爲三洞大法師。今復命我、來爲子作第一度師。(後略)」(太上玄一真人鬱羅翹太極左仙公に告げて曰く、「子は劫を積みて念行し、(中略)、功德は巍巍として、行ひは上仙に合す。太上は太極真人徐來勒に命じ、汝を保して三洞大法師と爲さしむ。今復た我に命じ、來りて子が爲に第一度師と作さしむ。(後略)」と。

この經典では、葛玄を保舉する師となつた太極真人から葛玄への過去の傳授の系譜と、太上に命じられて三度師となつた太上玄一三真人から葛玄へという新たな傳授の系譜の二つが示されている。太極真人が葛玄を保舉したことは、先に見た『智慧本願經』で太極真人が葛玄の師保になつたという記述と合致しており、また『自然經訣』で太極真人が葛玄に降つた記述から見ても、『法輪罪福』は「仙公新經」諸經に見える傳授の系譜を承けていると言える。『法輪妙經』A(四丁裏)では、更に何故、今また三人の真人が葛玄に降臨することになったのか、太上玄一第一真人により、次のように説明される。即ち、

但子積劫勤尙、展轉不倦、功滿德就、瓊文紫字列於

玄臺、位登太極仙公之任。而三師不備、勸戒未充於格、未得便登太極之宮也。太上以子宿勳高重故、命我等爲子三師、度子要訣、以成子道、使子速得飛騰三界、遊乎上清、身詣金闕、受號仙公也(但だ子は劫を積みて勤めて尙び、展轉して倦まず、功滿ち德就き、瓊文紫字は玄臺に列なり、位は太極仙公の任に登る。而して三師備はらず、勸戒未だ格を充たざれば、未だ便ち太極の宮に登るを得ざるなり。太上は子の宿勳の高く重きを以ての故に、我等に命じて子の三師と爲し、子に要訣を度し、以て子の道を成じ、子をして速やかに三界を飛騰するを得て、上清に遊び、身は金闕に詣り、仙公を受號せしめんとするなり)、

とあり、太極真人の傳授では三師や勸戒が不備の爲、葛玄は太極仙公の位に登る資格がありながら未だ太極の宮に登ることができないので、太上の命で太上玄一三真人が三師となり、要訣を葛玄に傳授して、葛玄が天界に昇り仙公の號を得られるようにする、という二度目の降臨の目的が語られる。つまりここでは、「仙公新經」諸經に見える太極真人↓葛玄の傳授の系譜を承けつつも、これを不備なものとしてその重要性を否定し、新たな太上玄一三真人から葛玄への傳授によ

り、葛玄の仙公登仙が成就されることを主張しており、『法輪罪福』が太上玄一三真人による新たな傳授の系譜を重視していることがわかる。この太上玄一三真人は「仙公新經」諸經には登場せず、ここに差異が見出せる。(唯一例外で、『自然經訣』に太上玄一三真人が見えるが、「五真人頌」の頌の題に名前があるのみである。)但し、神塚淑子氏は、この三真人も廣義の太極真人であると指摘している。⁶⁾そこから見れば、「仙公新經」諸經と『法輪罪福』の間の差異は、「太極真人↓葛玄」という傳授の系譜の枠に於ける太極真人の違いに過ぎないと言えるかもしれない。しかし、傳授の系譜に新たな天眞が加上されていることから、『法輪罪福』は少なくとも、前掲三例のような太極真人(徐來勒)から葛玄への傳授の系譜のみを示す「仙公新經」諸經より後に作られた經典であることが推察される。⁷⁾そこから考えられることは、陸修靜による『法輪罪福』の分類に、經典の成立時期が關係している可能性がある。そこで次に、經典の分類に關わる陸修靜の靈寶經史觀について見てみたい。

三、陸修靜の靈寶經史觀と『法輪罪福』

(一) 陸修靜の靈寶經史觀と靈寶經の分類

『法輪罪福』は現行本を見る限り「仙公所受」經典であり、主神として元始天尊が登場する場面もない。それでは陸修靜の靈寶經觀に照らした場合、どのような理由で「仙公所受」經典である『法輪罪福』を「元始舊經」に分類し得るのか、その點について考察する。

陸修靜の靈寶經觀は、元嘉十四年(四三七)の著述「靈寶經目序」中の靈寶經の歴史について述べた、以下の部分から窺い知ることができる。

陸修靜「靈寶經目序」(以下、「目序」、『雲笈七籤』(HY一〇二

六) 卷四所收)

①夫靈寶之文始於龍漢、龍漢之前、莫之追記。延康長劫、混沌無期、道之隱淪、寶經不彰。赤明革運、靈文興焉。

(中略)上皇元年、元始下教、大法流行。衆聖演暢、修集雜要、以備十部三十六帙、引導後學、救度天人(夫れ靈寶の文は龍漢に始まり、龍漢の前、之を追記する莫し。延康は長劫にして、混沌として期無く、道の隱淪して、寶經彰かならず。赤明に運を革め、靈文焉に興る。(中略)上皇元年、元

始教を下し、大法流行す。衆聖演暢し、雜要を修集して、以て十部三十六帙を備へ、後學を引導し、天人を救度す。(四丁)

②上皇之後、六天運行、衆聖幽昇、經還大羅。自茲以來、廻絕元法。雖高辛招雲輿之校、大禹獲鍾山之書、老君降眞於天師、仙公授文於天台、斯皆由動感太上、指成聖業。豈非揚芳於世、普宣一切也(上皇の後、六天運行し、衆聖幽昇し、經は大羅に還る。茲より以來、元法を廻絶す。高辛は雲輿の校を招き、大禹は鍾山の書を獲、老君は眞を天師に降し、仙公は文を天台に授くと雖も、斯れ皆動もて太上を感ぜしめ、聖業を指成するに由る。豈に世に揚芳して、普く一切に宣ぶるに非ずや)。(四丁裏く五丁表)

③(中略)龍精之後、續祚之君、罷除僞主、退翦逆民、衆道勢訖。此經當行。推數考實、莫不信然。期運既至、大法方隆。但經始興、未盡顯行。(龍精の後、續祚の君、僞主を罷除し、逆民を退翦し、衆道の勢訖はる。此の經當に行ふべし。數を推し實を考ふるに、信然ならざるは莫し。期運既に至り、大法方に隆んならんとす。但だ經始めて興り、未だ盡くは顯行せず)。(五丁表)

ここに開陳される陸修靜の靈寶經觀は、靈寶經史觀とも言える。①では想像上の太古の時代に元始天尊が教説した「十

部三十六帙」の經について述べている。②では、元始天尊教説の經が天に還つた後の劉宋建國以前の時代に、仙公(葛玄)に靈寶經が傳授されたことを記述する。ここから、陸修靜は劉宋以前に存在していた靈寶經を、「十部三十六帙」の經とは別に、新たに出現して仙公に傳授された經と考えていたことがわかる。③は、劉宋建國直前の時代、先に天上界に還つていた「十部三十六帙」の經が、劉宋建國の瑞兆として地上に出現し始めたことを述べており、陸修靜が劉宋建國時に出現し始めた靈寶經を、元始天尊教説の經と考えていたことを示している。即ち、陸修靜の考える靈寶經とは、劉宋建國を境として、それ以前に存在した靈寶經と、劉宋建國以降に出現し始めた靈寶經という、成立した時代が異なる二系統の經典から成るものであり、敦煌本「靈寶經目錄」はこのような靈寶經觀に基づき、古靈寶經を「元始舊經」と「仙公新經」に分類・著録していると考えられる。陸修靜の靈寶經史觀に照らせば、敦煌本「靈寶經目錄」著録の「仙公新經」は、劉宋建國以前に世に行われていた靈寶經ということになる。また、劉宋建國以降に出現した靈寶經典は、元始天尊教説の「十部三十六帙」の經、即ち「元始舊經」に該當する。ところで筆者は以前、『法輪罪福』が「元始」の語や經を祕

藏する紫微宮という、「元始舊經」に特徴的とされる内容（※これらについては、本稿の四で改めて取り上げる）を含んでいることが分類の上で優先され、「元始舊經」に分類された可能性を指摘した。^⑩しかし、「元始」の語が見える『太上洞玄靈寶真文要解上經』（HY三三〇。以下、『真文要解』や、紫微宮の經典祕藏を述べる『自然經訣』が「仙公新經」に分類されていることを考えると、それらは陸修靜にとつて、分類の上での決定条件ではなかった可能性も考えられる。一方で、陸修靜がその靈寶經觀に沿って、古靈寶經をその出現時期をもとに「元始舊經」と「仙公新經」に分類していたと推測すると、『法輪罪福』だけでなく、『真文要解』や『自然經訣』の分類についても、一定の合理的説明が可能になる。更に踏み込んで言えば、ひと口に劉宋建國以前の時代と言っても、最初の靈寶經典の成立から劉宋建國直前までの間には、時間の経過に伴い、教義や思想面での展開・発展があったと考えられる。「仙公新經」に、他の「仙公新經」諸經と比較すると例外的分類に見える『真文要解』のような經典^⑪や、經典の一部に「元始舊經」に特徴的なものと考えられている内容が見える『自然經訣』のような經典が含まれる状況は、經典を出現時期で分類したこと起因するのかもしれない。それでは

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

『法輪罪福』自体はいつ頃成立したのか。次にその点について、道藏本『法輪妙經』の内容から考察する。

（二）道藏本『法輪妙經』に見える宇宙生成論

『法輪妙經』Aには宇宙生成論が見える。筆者は、これが『法輪罪福』の成立時期を知る一つの手がかりになるのではないかと考える。『法輪妙經』Aの三丁裏から四丁表では、太上玄一真人が『法輪罪福』の起源に關わる宇宙の生成過程について次のように述べる。

夫天地建立、元始分判、陰陽開化、五行列位、（中略）、皆稟受空洞、以氣爲宗。宗生於始、始生於元、元生於玄、三生萬物、莫不相承（夫れ天地建立し、元始分判し、陰陽開化し、五行位を列ぬるに、（中略）、皆空洞を稟受し、氣を以て宗と爲す。宗は始より生じ、始は元より生じ、元は玄より生じ、三は萬物を生じ、相ひ承けざるは莫し）。

ここに見える「玄元始」は玄元始三氣であり、「三生萬物」とはこの玄元始三氣から萬物が生ずることと解釋できる。先行研究によれば、玄元始三氣から萬物が形成されるという概念による典型的世界觀が見える例が、『三天內解經』（HY一九六）である。この經典は、劉宋建國當時の成立とされており、宇宙の生成について次のように記述される。^⑫

空洞之中、生乎太無。太無變化玄氣元氣始氣。三氣混沌相因、而生玄妙玉女。玉女生後、混氣凝結、化生老子。

(中略) 變化成氣、天地人物、故輪轉而化生(空洞の中、太無を生ず。太無變じて玄氣元氣始氣と化す。三氣混沌として相ひ因り、而して玄妙玉女を生ず。玉女生じて後、混氣凝結し、老子に化生す。(中略) 變化して氣を成し、天地人物、故に輪轉して化生す)。(卷上二丁裏)

ここでは、「太無」から玄元始三氣が生じ、三氣が混ざり凝結して老子となり、(老子が)變化して氣を成じ、萬物が形成される過程の中で、一氣↓三氣↓萬物の生成パターンが示されている。玄元始三氣は「太無」から同時に生じており、三氣の間に生成の關係はない。これに對し、『法輪妙經』Aでは、始(始氣)は元(元氣)から生じ、元(元氣)は玄(玄氣)から生じ、そのようにして揃った玄元始三氣から萬物が生じるといふ生成パターンを説いており、三氣の間に生成の關係が存在する。玄元始三氣が同時に生じるのではなく、玄氣、元氣、始氣の順に生じるといふ發想は、『洞玄靈寶自然九天生神章經』(HY三一八)「三寶大有金書」二丁裏に、「三寶皆三炁之尊神號(三寶は皆な三炁の尊神の號)」と説明され、玄元始三氣と結びつけられた三寶君が、玄元始の順に出現時

期をずらしていることに見えるが、天寶君(玄氣)、靈寶君(元氣)、神寶君(始氣)の間に生成の關係は見えない。玄元始三氣の間に生成關係が設定されている『法輪妙經』Aの宇宙生成論は、『三天內解經』の生成論を更に獨自に發展させたものと見ることができ、『法輪罪福』が『三天內解經』より後に成立した可能性が高いことを示している。『三天內解經』より遅い成立であるとする、『法輪罪福』は劉宋建國以降に成立した經典であると考えることができる。

以上、經文中に見える宇宙生成論から推定される『法輪罪福』の實際の成立時期は、劉宋建國後である可能性が高く、このことは、劉宋建國以降に新たに出現した靈寶經を「元始舊經」とした陸修靜が、『法輪罪福』を「元始舊經」に分類した事とも整合する。

ところで、陸修靜の靈寶經史觀とは、現實の歴史に對して、どのようなスタンスを取っていたのであろうか。そこで次に、その點について考察したい。

(三)「靈寶經目序」に見える陸修靜の靈寶經史觀

(一)に挙げた「目序」は、陸修靜が元嘉十四年(四三七)に編んだ『靈寶經目』の序であり、そこに開陳される陸修靜の靈寶經史觀は、四三七年には既に形成されていたことにな

る。「目序」の書かれた元嘉十四年は、劉宋建國の四二〇年から僅か十七年を隔てるのみであり、建國當時のことを記憶し、劉宋建國以降どのような經典が出現したかを知る人々も、當然存在していたはずである。世間の記憶がまだ鮮明な時にあって、陸修靜が現實の歴史と乖離した靈寶經の歴史を語ったとすれば、人々の信賴は得られなかったであろう。「目序」を見る限り、陸修靜自身、寧ろ歴史を巧みに利用して、靈寶經の出現を權威づけているように見える。何故なら、檢證の仕様のない、「元始舊經」の起源を語る太古の時代以外の「目序」が語る靈寶經の歴史を見ると、それは基本的に歴史の流れに沿うものであることが窺えるからである。本稿三の(一)に引用した「目序」の③の部分に「龍精之後、續祚之君、罷除僞主、退翦逆民、衆道勢訖。此經當行。」とあり、劉宋建國直前の様子が語られている。大淵忍爾氏は、「龍精」は帝室、即ち晉王朝を指し、「續祚之君」は劉裕、「僞主」は桓溫、「逆民」は孫恩を指すと指摘する¹³⁾。これに従えば、「目序」は、晉朝末期に劉裕が桓溫、孫恩を討ったのち、「此經當行」として、靈寶經が世に行われるべき時が來たことを述べている。これは陸修靜が、劉宋建國前後の歴史の敘述に自分の考える靈寶經の歴史を組み込むことにより、靈寶經の出

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け(林)

現が劉宋建國の瑞兆であるという主張に、説得力を持たせようとしたと見ることができると言える。「目序」の記述が現實の歴史の流れに沿うものであるなら、陸修靜が靈寶經を、劉宋建國以前から存在していた經典と建國以降新たに出現した經典の二つの經典カテゴリーに分けたことは、靈寶經典整理の一環として、現實に存在する一群の靈寶經典を、その出現時期に基づき歴史上に位置付ける試みであったと考えることができる。つまり、陸修靜が劉宋建國を境として靈寶經を新舊二つの經典カテゴリーに分類した時、それはそれらの經典の現實の出現時期を無視するものではなかった可能性が高いと考えられる。

以上、『法輪罪福』が内容的にも劉宋建國以降に成立した經典である可能性が高く、またそれ故、陸修靜の靈寶經史觀に基づき、「元始舊經」に分類されたと考えられることを示した。そこで次に、『法輪罪福』が「元始舊經」であると考へ得る他の理由についても改めて考察してみたい。

四、『法輪罪福』の内容から見る「元始舊經」 との關係

(一)『法輪罪福』と「元始舊經」

本稿の二では、「仙公新經」諸經にはば共通して見える太極真人と葛玄の傳授の系譜を、『法輪罪福』との比較の對象とした。「元始舊經」諸經にも、幾つかの共通した内容や傾向が見える。先にも述べたように、筆者は以前、それらを分類條件と假定し、それに従つて分類すれば、一應例外なく古靈寶經が新舊二つの經典カテゴリーに分類できることを確かめた。ここでは、それらが『法輪罪福』の現行本にも見えることを改めて確認し、『法輪罪福』と「元始舊經」の關係について考察する。

1. 「元始」の語：『法輪妙經』A、B、Cには、「元始」の語が見える。

1) 『法輪妙經』Aの例：「元始」

三の(二)でも觸れたが、『法輪妙經』Aには、「元始分判」(三丁裏)の句の中に「元始」の語が見える。この「元始」は始源の時を意味するものであり、元始天尊を略した呼稱ではないが、元始天尊がその神格名から窺えるように始源

の存在であることから、陸修靜が、『法輪罪福』中の「元始」を元始天尊の意味に解釋した可能性も否定できない⁽¹⁵⁾。

2) 『法輪妙經』Bの例：「元始同生」

ここでは、「此文與元始同生、包含天地、億劫長存、廣度一切、爲諸津梁(此の文は元始と同一に生じ、天地を包含し、億劫長存し、廣く一切を度し、諸々の津梁と爲る)」(六丁裏)とある。ここでの「元始」も始源の時を指す語と解釋される。この表現は「仙公新經」諸經中には見えないが、「元始舊經」諸經の中には散見する。以下に、その例を挙げる。

① 『天書經』卷上には、「五帝眞符以元始同生(五帝眞符は元始を以て同に生ず)」(三九丁表)とあり、「元始同生」という表現が見える。

② 『太上靈寶諸天内音玉字』(HY九七)卷三には、「是天中神公之内名、與元始同生、爲玄炁之範、開滅度之門、教學仙之人君(是れ天中神公の内名、元始と同一に生じ、玄炁の範と爲り、滅度の門を開き、學仙の人君を教ふ)」(二七丁表)とあり、ここにも「元始同生」という表現が見える。

3) 『法輪妙經』Cの例：「元始之先」

ここでは「此三篇偈頌出元始之先(此の三篇の偈頌は元始の先に出づ)」(十一丁表)とあり、「元始之先」という表現が見

える。「元始舊經」諸經の『天書經』卷上にも「元始洞玄靈寶赤書玉篇眞文、生於元始之先、空洞之中（元始洞玄靈寶赤書玉篇眞文は、元始の先、空洞の中に生ず）」（二丁）とあり、「元始之先」という表現が見える。現行本を見る限り、「仙公新經」諸經にはこのような表現は見えない。

2. 「紫微宮」に於ける靈寶經の祕藏

『法輪妙經』Dには、「其文祕於太上紫微宮中（其の文は太上紫微宮中に祕す）」云々（八丁裏）とあり、經典が天上の紫微宮に祕藏されている、という經典觀が窺える。「元始舊經」諸經には、眞文や神符が紫微宮に收藏、或は祕藏されていることに言及するものが複数例ある。以下にその例を挙げる。

①『天書經』卷上に、「舊文今祕於玄都紫微宮（舊文は今玄都紫微宮に祕す）」（三九丁表）とあり、舊文（天文）が紫微宮に祕藏されることを述べる。

②『太上洞玄靈寶三三元品戒功德輕重經』（HY四五六）には、「紫微宮中有延生之符（紫微宮中に延生の符有り）」（二丁裏）とあり、符が紫微宮中に收藏されていることが見える。

③『智慧罪根經』卷下には、「吾過去後、其文當還大羅之上、七寶玄臺紫微宮中（吾れ過去せし後、其の文當に大羅の上、七寶玄臺紫微宮中に還るべし）」（十七丁裏、十八丁表）と

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

あり、ここでは、元始天尊過去後、經が大羅天の紫微宮に還ることを述べており、紫微宮との密接な關係が窺える。

また敦煌本「靈寶經目錄」には、「元始舊經紫微金格目三十六卷。（中略）十部妙經三十六卷、皆尅金爲字、書於玉簡之上、題其篇目於紫微宮（元始舊經紫微金格目三十六卷。（中略）十部妙經三十六卷、皆な金を尅して字を爲り、玉簡の上に書し、其の篇目を紫微宮に題す）」とあり、陸修靜が考える「元始舊經」も紫微宮と密接な關係にあるとされている。換言すれば、本來、紫微宮中に收藏されている、或は太古に地上に行われたのち再び紫微宮に還るという設定の靈寶經が、陸修靜の考える「元始舊經」であつたと言える。

以上、道藏本『法輪妙經』中に見える「元始」の語やそれを含む表現、及び紫微宮中に經が祕藏されているという考えは、他の複数の「元始舊經」諸經中にも見えることを確認した。これらの事例から、『法輪罪福』は「仙公新經」諸經よりも、内容的には「元始舊經」諸經と近い關係にあつたことが窺える。しかもこれだけではなく、現行本を見る限り、『法輪罪福』には教義・思想内容の面で、二つの「元始舊經」諸經とより深い影響關係が窺える。次に、その點について考察する。

(二)『法輪妙經』と二つの「元始舊經」諸經の關係

『法輪妙經』Cでは、神格としての「道（太上道君）」が八門出遊し、八方無極世界の地獄を歴覽して、様々な考罰に苦しむ人々の姿を目にし、飛天人から、彼らは生前の惡行の應報として、無極世界地獄で惡行に對應した考罰を受けた後、轉生して家畜などに生まれ、人の道に返ることができないという罪報の説明を受ける。ここに善惡應報の思想が説かれている。「仙公新經」諸經でも、『太極真人敷靈寶齋戒威儀諸經要訣』（HY五三）や、『智慧本願經』等に、生前の惡行と、死後、その罪報として地獄で受ける考罰が説かれている。生前の惡行やその罪報の内容は、『法輪妙經』Cに見えるものとはほぼ同じなので、當時、そのような善惡應報のイメージが一般化していたのかもしれない。しかし、「仙公新經」諸經では、至尊の神格が自ら出遊して各地獄を巡るという發想は見えない。また、「仙公新經」諸經では、惡人が死後に赴く世界を無極世界と呼ぶ例も見えないが、「元始舊經」諸經では、『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明真科』（HY一四〇〇。以下、『九幽玉匱明真科』）と『智慧罪根經』に、人々が生前の惡行により死後に赴く所は無極世界と記され、そこで受ける罪報と生前の罪過の應報關係の解説に關わる神格として飛天神

人^②が登場する。この飛天神人は「仙公新經」諸經には見えない。

『智慧罪根經』卷下には、『法輪妙經』Cと同様、「太上道君」が出遊し、十方無極世界を巡歴するくだりが見える。十方と八方で數は異なるものの、その發想は同じであり、兩者の間には深い影響關係が窺える。例として、東の無極世界の描寫を以下に示す。

1)『法輪妙經』C (①一丁裏、二丁表、②二丁表)

①出遊東門、見百姓子男女人、口面膿爛血臭流出、頸如垂線腹如懸鼓、身有鐵錐、口中銜火、大小相牽、流曳途炭、無復人形、足踐刀刃之上、身負鐵杖、痛不可負、毒不可忍（東門を出遊し、百姓子男女の人を見るに、口面は膿爛し、血臭流出し、頸は垂線の如く、腹は懸鼓の如し。身に鐵錐有り、口中に火を銜へ、大小相ひ牽き、途炭を流曳し、人の形を復する無く、足は刀刃の上を踐み、身に鐵杖を負ひ、痛みは負ふべからず、毒は忍ぶべからず）。

②東極世界飛天人曰、「斯罪人也。其前身所行、惡口赤舌、評論道德、攻伐師主、更相讒擊、或殺害無道、不念衆生、酷虐爲行、心懷陰惡、誅戮無度、嫉妬勝己、抑絕賢明、致招今對。諸苦備經、萬劫當還生非人之道。其因如

此」(東極世界飛天人曰く。「斯れ罪人なり。其の前身の所行は、惡口赤舌し、道徳を評論し、師主を攻伐し、更も相ひ讒撃し、或は殺害すること無道、衆生を念ぜず、酷虐もて行ひと爲し、心に陰惡を懷き、誅戮して度無く、己に勝るを嫉妬し、賢明を抑絶し、今の對を招くを致す。諸々の苦しみ備さに經て、萬劫して當に非人の道に還生すべし。其の因此くの如し」と)。

2) 『智慧罪根經』卷下(一丁裏―二丁表)

(太上道君 出遊東門、見東方無極世界地獄之中、有百姓子男女人、身受考撻、諸痛備嬰、形體毀悴、苦毒難言。(中略) 東極世界飛天神人曰、「其所犯元惡、罪錄結在『九幽長夜之函』。(中略) 九萬劫得還生非人之道、(後略)」(東門を出遊し、東方無極世界地獄の中を見るに、百姓子男女の人有り、身に考撻を受け、諸々の痛み備さに嬰はり、形體は毀悴し、苦毒言ひ難し。(中略) 東極世界飛天神人曰く、「其の人の犯す所の元惡は、罪錄結びて『九幽長夜之函』に在り。(中略) 九萬劫して非人の道に還生するを得るべし、(後略)」と)。

『智慧罪根經』の描寫の方が『法輪妙經』Cより簡短であるが、無極世界で人々が罪報を受ける情況を述べ、飛天神人が惡行應報を説く形式は同じである。また、『九幽玉匱明眞

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け(林)

科』には、『法輪妙經』Cとほぼ同文の、生前の惡行とその罪報の説明が見える。

3) 『九幽玉匱明眞科』(八丁裏)

無極世界男女之人生世身行、不念爲善、動爲惡根、攻伐師主、讒擊善人、殺害無道、不念衆生、酷虐爲行、陰懷謀逆、嫉妬勝己、抑絶賢明。死受惡對、拘閉罪魂、徑入地獄、長夜之中、諸通備加、苦毒難勝。萬劫當還生非人之道(無極世界男女の人の生世の身行は、善を爲すを念じず、動もすれば惡根を爲し、師主を攻伐し、善人を讒撃し、殺害すること無道、衆生を念じず、酷虐もて行ひと爲し、陰に謀逆を懷き、己に勝るを嫉妬し、賢明を抑絶す。死して惡對を受け、罪魂を拘閉され、徑ちに地獄に入り、長夜の中、諸々の痛み備さに加はり、苦毒勝げ難し。萬劫して當に非人の道に還生すべし)。

ここでは、單に無極世界とあるだけだが、そこにいる人々が生前、どのような惡行を犯して、死後、無極世界でその報いとしての考罰を受けるかを述べて惡行應報を説く方法は、『法輪妙經』Cや『智慧罪根經』と同じである。以上から、少なくとも『法輪罪福』が『九幽玉匱明眞科』、『智慧罪根經』という二つの「元始舊經」諸經と密接な影響關係にあつ

たことは指摘できる。道藏本『法輪妙經』を見る限り、思想・教義の内容の面で、このように濃厚な關係性は「仙公新經」諸經との間には見出せない。この點からも、『法輪罪福』は、「元始舊經」諸經とより近い關係性を持つていと言えらる。また、教義を説く方法や、表現の類似から見て、『法輪罪福』の成立時期は、この二つの「元始舊經」諸經の成立時期と前後していた可能性が高いと考えられる。

五、おわりに

(一) 考察の結果

本稿で、『法輪罪福』について考察したことを以下にまとめる。

『法輪罪福』は、「仙公新經」諸經が根幹に置く「太極真人↓葛玄」という傳授の系譜の上に、新たに「太上玄一三真人↓葛玄」という傳授の系譜を加えている。このような傳授の系譜の差異から考えられることは、この經典が「仙公新經」諸經より後出の靈寶經である可能性である。「目序」中に示される陸修靜の靈寶經觀に照らすと、劉宋建國以前に存在していた靈寶經である「仙公新經」より後出の經典は、劉宋建國後に成立した經典ということになり、それは劉宋建國以降

に出現し始めた靈寶經である「元始舊經」に分類される。『法輪罪福』は、その成立時期を知る手がかりとして、現行本中に玄元始三氣から萬物が生じるといふ宇宙生成論を含む。このような宇宙生成論は、劉宋建國當時の成立とされる『三天內解經』巻上に見えるものが典型とされるが、ここでは、玄元始三氣は同時に太無から化生しており、三氣の間に生成關係はない。三氣の間に玄氣↓元氣↓始氣という生成過程を考える『法輪妙經』Aの宇宙生成論は、『三天內解經』の宇宙生成論から獨自に展開したと見ることができ、『法輪罪福』は『三天內解經』より後に成立した可能性が高い。これは即ち、『法輪罪福』が劉宋建國以降の成立であることを示し、陸修靜がこの經典を劉宋以降に出現し始めた靈寶經である「元始舊經」に分類していることも整合する。更に『法輪罪福』は、「元始」の用例や「紫微宮」の設定、善惡應報を説く方法からも、「仙公新經」諸經より「元始舊經」諸經との關係が密接であると考えられる。これも、陸修靜が『法輪罪福』を「元始舊經」に分類したことで矛盾しない。これから陸修靜が古靈寶經の分類に於いて、從來考えられてきたような神格系統の違いや、「仙公所受」・「元始天尊教説」いずれの經典かということだけでなく、劉宋建國を境とする

經典の出現時期を重視していた可能性の高いことが指摘できる。また、そこから改めて、『法輪罪福』と「仙公新經」諸經の間に見える傳授の系譜の差異は、經典の成立時期の早晚から生じたものであると言える。

以上から、『法輪罪福』は、陸修靜がその靈寶經觀に基づき「元始舊經」として分類し、古靈寶經中に位置付けた經典であると見るができる。

(二) 今後の展望

本稿での考察から、陸修靜の古靈寶經の分類基準には、その經典の出現時期が含まれていた可能性が高く、加えて陸修靜が「目序」の中で語る靈寶經の歴史は、現實の歴史の中に組み込まれていることから、靈寶經典の分類も歴史の流れに沿うものであったと考えられる。それは即ち、陸修靜により「仙公新經」に分類された靈寶經は、彼が劉宋以前に世に出た靈寶經と判定した經典であり、「元始舊經」に分類された靈寶經は、劉宋建國以後に出現した靈寶經と判定した經典ということになる。このことから、陸修靜が「仙公新經」に分類した靈寶經は劉宋以前に成立していた經典であり、「元始舊經」に分類した靈寶經は劉宋建國以後に成立した經典である可能性が高いことが指摘できる。これまで諸先學に

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

より「靈寶經は新舊二系統から成る」ということを前提として、「仙公新經」と「元始舊經」の成立時期の前後関係について長く議論されてきた。従来、「元始舊經」が「仙公新經」に先行して作られたとする見解が一般的であったが、劉屹氏は主神の違いや思想内容から、「仙公新經」が「元始舊經」より先に作られたという見解を示している。^{②③}筆者は陸修靜の靈寶經觀から古靈寶經の分類についての考察を試みており、その點で先學と異なる。本稿では、『法輪罪福』の古靈寶經に於ける位置付けの再考から、陸修靜の分類基準には經典の成立時期が含まれるのではないかという見解に達し、これにより「仙公新經」諸經が「元始舊經」諸經に先行して作られた可能性を考えるに至った。但し、これはまだ『法輪罪福』一例について考察しただけである。今後の研究の展望としては、『洞玄靈寶玉京山步虛經』（HY一四二七）や、『太上無極大道自然眞一五稱符上經』（HY六七二）、『眞文要解』という、先行研究では『法輪罪福』と同じく例外的に分類された經典であるとされるものについても、その位置付けを再検証し、その結果が今同導き出した結果と整合するか否かを検証する必要がある。（更に、「仙公新經」諸經も「元始舊經」諸經も、その成立の早晚による經典内容の差異や他の古靈寶經との關係

について、今後、個々に檢證されるべきと考える。筆者は前に述べたように、「仙公新經」・「元始舊經」という經典カテゴリーは、元々靈寶經に新舊二系統があったことを反映しているものではなく、劉宋以降に出現し始めた新たな靈寶經を劉宋建國の瑞兆として、靈寶經の體系化を圖った陸修靜が設定した經典の分類概念であると考ええる。それ故、古靈寶經の分類と成立の前後關係について考察する際には、「新舊二系統の古靈寶經」の中で「仙公新經」が「元始舊經」に先行して作られたと見るのではなく、陸修靜により「仙公新經」に分類された經典の多くが、「元始舊經」に分類された經典より先に成立していた可能性が高いと見ることが適當である、と考えている。陸修靜の分類が、經典の成立時期に關わるものであったとすれば、長年に亘り議論されてきた新舊の經典の作者の問題や、新舊の經典間の關係についても、新たな視點から考察する必要が出てくるかもしれない。また、これまで古靈寶經の多元性として映っていたものの中には、靈寶經の展開の過程がそのように見せているものも含まれる可能性があると考ええる。

〔注〕 ※書籍・論文著者については敬稱略

- (1) 大淵忍爾 “On Ku Ling-Pao-Ching”, *The Acta Asimnica* 27, Toho Gakkaï, 1974. 敦煌寫本中のこの目録については、同氏編『敦煌道經・圖録篇』（一九七九年、福武書店）七二五～七二七頁を参照。
- (2) 小林正美 『六朝道教史研究』（創文社、一九九〇年）第一篇第三章四。
- (3) 林佳恵 『六朝江南道教の研究』（二〇一九年、早稻田大學出版社）第一篇第一章。
- (4) このことは小林正美氏が最初に指摘している。（同氏前掲書（一九九〇年）第一篇第三章四。）また、神塚淑子氏は、『法輪妙經』Aの中で三真人が各々葛玄に傳授する要訣が、『法輪妙經』B・Dに對應していることを指摘している。（同氏『道教經典の形成と佛教』（名古屋大學出版會、二〇一七年）第一篇第三章二。）
- (5) 主な先行研究として小林前掲書（一九九〇年）第一篇第三章三（2）、大淵忍爾『道教とその經典』（創文社、一九九七年）第二章四等を参照。
- (6) 神塚前掲書（二〇一七年）第一篇第三章二。
- (7) 「仙公新經」諸經では一人の師による傳授を述べるのに對し、道藏本『法輪妙經』は三師による傳授を述べており、傳授儀の整備と展開の過程という面から見ても、『法輪罪福』

は後出の經典である可能性が考えられる。古靈寶經に見える師による傳授については、王宗昱『道教義樞』研究』（上海文化出版社、二〇〇一年）第二章第四節「三寶義」参照。

- (8) 「目序」の記述から、敦煌本「靈寶經目錄」で「太上洞玄靈寶天文五符經序」が、「仙公新經」に分類されている理由も理解される。林前掲書（二〇一九年）第一篇第二章参照。

- (9) 「目序」ではまだ「元始舊經」、「仙公新經」の表記は見えないが、その後の著述とされる陸修靜の『太上洞玄靈寶授度儀』（HY五二八、以下『授度儀』）の「表」は、この二系統の經典群を「元始舊經」、「仙公所稟」と表記している。『授度儀』の成立時期については、小林前掲書（一九九〇年）第一篇第三章注(3)参照。

- (10) 陸修靜の靈寶經の分類については、林前掲書（二〇一九年）第一篇第一章参照のこと。

- (11) 『眞文要解』を例外的分類類とする先行研究としては、小林前掲書（一九九〇年）第一篇第三章四、及び劉屹『眞文要解上經』考論』（『東方學研究論集』二〇一四年）がある。『自然經訣』については、注(16)を参照のこと。

- (12) 宇宙生成論については、麥谷邦夫「道教的生成論の形成と展開」（『文哲文學會報』第四號、一九七九年）、小野澤精一、福永光司、山井湧編『氣の思想』（東京大學出版會、一九七八年）第二部第一章第二節参照。『三天內解經』が劉宋初の成立であることは、楊聯陞『老君音誦誡經』校釋』（三）

古靈寶經に於ける『法輪罪福』の位置付け（林）

（『中國語文札記』、二〇〇六年、中國人民大學出版社。※一九五六年初出、大淵忍爾『道教史の研究』（一九六四年、岡山大學共濟會書籍部、五〇一頁）、小林前掲書（一九九〇年、二〇八、二一〇、三八三―三八四頁）等で指摘されている。

- (13) 大淵前掲書（一九九七年）第二章二參照。

- (14) 林前掲書（二〇一九年）第一篇第一章参照。

- (15) 「元始」の語で元始天尊を表す例もある。例えば、『天書經』卷上に「元始鍊之於洞陽之館、治之於流火之庭。（元始之を洞陽の館に於いて鍊り、之を流火の庭に於いて治す。）」（二丁裏）とあり、ここでの「元始」は元始天尊を示す。

- (16) 紫微宮が經を祕藏することは、「仙公新經」の『自然經訣』（敦煌寫本ベリオ二四五二）の眞人頌の中にも、「太上大道君、出是靈寶經。（中略）」「上紫微臺、下藏諸名山」（太上大道君、出ずは是れ靈寶經。（中略）」「上紫微臺に寶とし、下諸名山に藏す）」（『中華道藏』第三卷九九頁上段）とある。「」で囲んだ部分は、敦煌寫本に缺損があり、陸修靜の『太上洞玄靈寶授度儀』（HY五二八）中の五眞人頌により補った部分であるが、北周の『無上祕要』（HY一―一三〇）卷三九「授洞玄眞文儀品」に『自然經訣』として同文の頌を引くので、「」部分も『自然經訣』の頌にあったと考えられる。筆者は以前、『自然經訣』は紫微宮祕藏の靈寶經を太上道君由來としている爲、陸修靜が「元始舊經」に分類しなかったと推測した（林前掲書（二〇一九年）第一篇第一章）が、現

時點では經典の成立時期により分類された可能性も考えている。

- (17) これは、「目序」の十部三十六帙の經（「元始舊經」）が大羅天に還る設定に通じる。

- (18) 「元始」の語は『眞文要解』にも見え、劉屹氏はこの經典に登場する「元始天王」の略稱とし、王承文氏は「元始天尊」の略稱とする。王氏の解釋は「元始舊經」が「仙公新經」に先行することを前提としている。筆者は現時點では、劉屹氏の解釋を支持する。劉屹前掲論文（二〇一四年）、王承文「古靈寶經・新經」徵引「元始舊經・問題新探」（『魏晉南北朝隋唐史資料』二〇一九年、四〇輯）參照。

- (19) 『眞文要解』には「十方懺謝」（八丁裏十四丁表）の中で、各方位の神仙を「○○無極世界神仙」と呼ぶ例が見えるが、この「無極世界」は地獄の觀念とは結びついていない。

- (20) 『九幽玉眞明眞科』では飛天神人、「法輪妙經」Cでは○○世界飛天人、「智慧罪根經」では○○世界飛天神人となっているが、その役割から見ても、同じ神格を表すと考えられる。

- (21) 『智慧罪根經』卷下の「一十五丁までは、太上道君が十方無極世界の地獄を歴覽する内容を記すが、十七丁表には「太上道君出遊八門、見諸地獄（太上道君八門を出遊し、諸々の地獄を見る）」とある。この記述から、『智慧罪根經』も元は太上道君の八門出遊を説いていた可能性が考えられる。

- (22) 劉屹氏も『法輪罪福』を「元始舊經」とする。但し氏は、

靈寶經が新舊二系統から成ることを前提として、『法輪罪福』を仙公系靈寶經の觀念に照らして作られ、「元始舊經」の卷數の不足分補充に使われた晚出の經典としている。（同氏「論古靈寶經・出者三分」説、『漢唐道教の歴史與文獻研究』所收、博揚文化事業有限公司、二〇一五年。）これは、陸修靜の靈寶經觀から『法輪罪福』の分類を考察する筆者の見解とは異なる。

- (23) 劉屹氏は論文〈「元始系」與「仙公系」靈寶經の前後問題——以「古靈寶經」中的「天尊」和「元始天尊」爲中心〉（『敦煌學』二〇〇八年、二七輯）以來、一貫して「仙公新經」が先行し、「元始舊經」は後出、という見解を示している。この問題に關する同氏の主要論文として、他に「元始舊經」與「仙公新經」の先後問題——以「篇章所見」的古靈寶經爲中心（『首都師範大學學報（社會科學版）』二〇〇九年、第三期）、「古靈寶經中的「三洞說」（『敦煌學國際學術研討會論文集』二〇一二年）等がある。王承文氏は「仙公新經」は「元始舊經」を補完・解説する後出の經典であるとして劉屹氏の見解に反論しており、最近の前掲論文（二〇一九年）や、論文「再論「元始舊經」和「新經」出世先後問題」（『中山大學學報（社會科學版）』二〇二〇年、第二期）でもその見解は変わっていない。（注（18）參照。）

〈キーワード〉古靈寶經、法輪罪福、陸修靜、元始舊經、仙公新經